

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）**  
**2015年度研究【経過・成果】報告書**

研究代表者	所属部局・職		氏名	
	社会学部・教授		井川 充雄 印	
研究課題	戦後の〈ヤミ市〉がもたらした都市文化とメディアの表象に関する多角的研究			
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2016年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏名	
	立教大学・社会学部・教授 立教大学・文学部・教授 立教大学・現代心理学部・教授 立教大学・江戸川乱歩記念 大衆文化研究センター・学 術調査員 立教大学・ESD 研究所・教 育研究コーディネーター 法政大学・文学部・助教 自由学園・教授、立教大学・ 名誉教授		井川充雄 石川巧 中村秀之 落合教幸 後藤隆基 山田夏樹 渡辺憲司	
研究期間	2015年度～2016年度			
研究経費※ (上段：支出金額)	2015年度	2016年度	年度	総計
	3,000,000 円			3,000,000 円
(下段：採択金額)	3,000,000	3,000,000		6,000,000

※1円単位で記入

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、敗戦によって食糧や物資の供給が少なくなり、人々が日々の暮らしにさえ困窮するなか、さまざまな都市に誕生した自由マーケット、いわゆる〈ヤミ市〉に焦点をあて、メディア研究、文学研究、映画研究、都市研究などの視点から〈ヤミ市〉の文化と表象を考察するものである。欲望の渦巻く〈ヤミ市〉の世界は混沌であると同時に新たな活力の源泉でもあった。〈ヤミ市〉を起点に広がった自由で柔軟な文化は、急激な経済復興を遂げていく日本社会にさまざまな影響を及ぼした。本研究は、研究代表者・分担者がそれぞれの専門分野から〈ヤミ市〉の世界を調査・探究・分析することによって、敗戦直後の日本の裏面史を捉え直すことを目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ ヤミ市 ] [ 都市文化 ] [ メディア表象 ]

## 研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

〈ヤミ市〉とは、戦後の統制経済下にあつて、公的に禁止された流通経路を扱う市場をさす。配給制度の破綻、取締り機能の弱体化と行政の黙認、戦時中の強制疎開にともなつて駅前周辺にできた空地の存在などを要因として誕生したヤミ市は、一方で非合法の流通でありながら、同時に焦土と化した日本が復興していくための原点でもあつた。GHQ の占領政策はもとより、都市の再開発とそこに集う人々の文化に至るまで、〈ヤミ市〉は戦後日本の発展過程を考えるうえで極めて重要な問題を内包している。また、これまでの研究としては、松平誠が『ヤミ市—東京池袋』(ドメス出版)や『ヤミ市 幻のガイドブック』(ちくま新書)で試みた生活文化論からのアプローチをはじめ、東京都江戸東京博物館の調査報告『ヤミ市模型の調査と展示』、橋口健二／初田香成の『盛り場はヤミ市から生まれた』(青弓社)、石樽督和「闇市の形成と土地所有からみる戦後東京の副都心ターミナル近傍の形成過程に関する研究」(明治大学博士学位申請論文、2014 年)などがあり、社会科学、建築学、都市工学の領域では同時代資料を活用した研究の蓄積がなされている。だが、戦後 70 年余りにわたつて、〈ヤミ市〉がどのように描かれ語られてきたのかという研究に関しては、同時代の状況を知る人々によって記録された一部の証言を除いて実証的な研究がなされておらず、戦後混乱期におけるひとつの特異現象として理解しようとする通俗的な言説に覆われている。本研究は、そうした現状をふまえて、文学・映画・メディアにおける〈ヤミ市〉の表象分析を試みるものである。〈ヤミ市〉をめぐる数々の言説や表現を通して、占領下の混沌のなかで人々がどのようにして生き延び、新しい日本を作ろうとしたのかを探究しようとするものである。

上記のような研究方針のもと、2015 年度は以下のような研究活動を行った(1~3 は共同研究メンバー全員が参画した活動。4 以下は石川、中村、井川の研究活動となる)。

- 1 立教大学・東京芸術劇場・豊島区が共催する《池袋＝自由文化都市プロジェクト》を立ち上げ、2015 年 9 月には東京芸術劇場ギャラリーにおいて「戦後池袋の検証—ヤミ市から自由文化都市へ—」という展示企画を行った。この展示の企画、構成、解説は共同研究メンバーが中心となつて行い、戦災で壊滅的な被害を受けた池袋の復興と巨大繁華街の誕生を検証した。具体的には、(1) 東京ヤミ市マップ、(2) ヤミ市とその実態、(3) 灰の中からの脱出—城北大空襲後の暮らし—、(4) 戦後池袋の光景 ① GHQ 占領期、(5) 戦後池袋の光景 ② 復興から高度経済成長期へ、(6) カストリ雑誌、(7) 戦後マンガ文化、(8) 人世坐(1948—1968) 人の世をうつした映画の光 といったコーナーを設け、それぞれの担当責任者が独自の展示を行った。また、この展示に先立って、吉見俊哉、マイク・モラスキー、川本三郎氏を迎えたシンポジウムを開催し、〈ヤミ市〉からの発展という観点で戦後池袋の変遷を追い、上記の企画展の内容を紹介した図録も作成した。
- 2 1 の企画展を契機として、〈ヤミ市〉という観点から戦後日本の都市文化とメディア表象を研究した共著を出版することが決まり、メンバーの井川充雄、中村秀之、石川巧が編者となつて企画を進めてきた。出版社はひつじ書房に決まり、すでに以下のような目次で原稿が完成している。「はじめに」(井川充雄)、第 1 章 シンポジウム「戦後池袋の検証—ヤミ市から自由文化都市へ—」(パネラー／川本三郎、吉見俊哉、マイク・モラスキー、司会／石川巧)、コラム「戦後池袋の風俗史」、第 2 章 都市とメディア 「都市としての闇市」(初田香成)、「民衆駅の誕生—国鉄駅本屋の戦災復興と駅ビル開発」(石樽監和)、「読売新聞による「新宿浄化」キャンペーン—ヤミ市

## 研究【経過・成果】の概要 つづき

解体へのエールー」(井川充雄) 第3章 ヤミ市の表象 「敗戦後日本のヘテロトピアー映画の中のヤミ市をめぐるー」(中村秀之)、「小説テキストにおける闇市・闇屋の表象」(渡部裕太)、「石川淳「焼跡のイエス」から手塚治虫、梶原一騎、王欣太「ReMember」ー戦後マンガにおける闇市の表象分析ー」(山田夏樹)、第4章 風俗と表現 「占領期東京の演劇空間ー小劇場・軽演劇・ストリップー」(後藤隆基)、「占領期の通俗小説における原爆の表象」(石川巧)、「昭和二十年代の探偵小説ー『宝石』の作家たちと新宿ー」(落合教幸)、「映画『君の名は』三部作(一九五三～一九五四)ー戦後的メロドラマの通俗性と感傷性ー」(河野真理江) 「戦後ヤミ市関連参考文献目録」、「索引(人名・作品名・事項)」、「おわりに」(石川巧)

- 3 2015年9月に雑誌『東京人』(都市出版)が試みた特集〈ヤミ市を歩く〉と連携し共同研究メンバーの石川、中村、後藤の三名がそれぞれ、「カストリ雑誌異聞」(石川)、「ヤミ市映画」(中村)、「額縁ショー」の流行」(後藤)を執筆している他、渡辺憲司が豊島区庁・高野之夫にインタビューした「池袋ー繁華街を支え、ともに息づく」も掲載されている。
- 4 大衆雑誌研究(石川巧)ーカストリ雑誌には、戦争の傷痕、飢えと貧困、性愛、エログロなど、占領期における日本社会の荒廃と混沌が赤裸々に描かれている。本研究では、「カストリ雑誌とはそもそも何だったのか?」という本質的な問題編成のもと、現存するカストリ雑誌に関する情報を可能な限り網羅的に蒐集し、総攬の編集をめざしている。具体的には、プランゲ文庫資料、福島鑄郎コレクション(早稲田大学図書館)、山本明コレクション(同志社大学図書館)、大阪芸術大学コレクション、石川個人蔵書(約4000冊)を調査してデータベースを作成したうえで総攬と呼ぶにふさわしい資料集をまとめる作業を継続中である。
- 5 メディア研究(井川充雄)ー戦後のヤミ市を巡る語りは、「復興から戦後へ」という戦後史の語り的一部分を形作っているといえる。また近年では、大衆文化のなかに「昭和30年代」に対するノスタルジーも存在する。こうした時代の記憶という問題を考えるとき、戦後日本の出発点ともいえるヤミ市の誕生から消滅までの過程を再検証することは重要な意味をもつ。2015年度は、占領軍が行った検閲資料であるプランゲ文庫やGHQの内部資料などを用いて、占領期における新聞や放送メディアがそこに何を見出し、どのような語り方で人々の記憶を構成していったのかを明らかにする研究を行った。
- 6 映画研究(中村秀之)ー敗戦後の日本人が生きていくための重要な市場であったヤミ市は、さまざまな映画作品のなかに描かれている。映画がその固有な形式と技法によって創造したヤミ市の世界には、ジャーナリズムの言論とも社会科学的な言語情報とも異なる新しい歴史の思考が提示されているのである。中村は、すでに『敗者の身ぶりーポスト占領期の日本映画』を上梓し、そのなかで対日講和条約発行前後の劇映画における身体イメージと時代状況との関連性を精密に分析しているが、本研究ではその手法をヤミ市という社会的表象に適用し、現実の歴史と映画独自のヴィジョンの関係を明らかにしている。

**研究発表**（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

- ①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
- ②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
- ④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

**① 雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）**

- ・石川巧「月刊毎日」発掘の続報」（「新潮」第 113 巻第 3 号、211-215 頁、2016）
- ・石川巧「徹底検証・「月刊毎日」とは何か」（「新潮」113 号第 2 号、121-146 頁、2016）
- ・石川巧「雑誌「国際女性」の資料的価値」（「跨境 日本語文学研究」第 2 号 178-199 頁、2015 年 6 月）
- ・石川巧「幻の雑誌「国際女性」と谷崎潤一郎」（「新潮」112 巻第 5 号 149-159 頁、2015）
- ・後藤隆基「戦後池袋演劇史—アバンギャルドと池袋文化劇場」『大衆文化』第 13 号、2015 年 9 月、31-50 頁
- ・後藤隆基「額縁ショーの流行—焼け跡に咲いた、踊り子たちの裸身」『東京人』第 358 号、2015 年 9 月、62-65 頁
- ・後藤隆基「三島戯曲上演における抽象と「リアリズム」—三条会『熱帯樹』論」『ゲストハウス』臨時増刊号 vii、2016 年 1 月、14-16 頁
- ・後藤隆基「芝居との、近接した関係」（『東京人』368 号、2016 年 4 月、62-67 頁  
「戦後の池袋劇場文化史」『東京芸術劇場開館 25 周年記念誌（仮題）』東京芸術劇場、2016 年刊行予定）
- ・後藤隆基「池袋の戦後史をめぐる〈場〉とにぎわいの創出—「池袋＝自由文化都市プロジェクト」にみる大学の地域連携の道筋」『大衆文化』第 14 号、2016 年刊行予定

**② 図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）**

- ・石川巧編著『「四国春秋」復刻版 附・解題、詳細総目次』（三人社、2015～2016）
- ・石川巧編著『高度成長期の出版社調査事典 全 8 巻』（金沢文圃閣、2014～2016）
- ・山田夏樹、日比嘉高、木村功、中村三春ほか共著、和泉書院、『作家／作者とは何か—テキスト・教室・サブカルチャー』2015 年 11 月、総 250 頁

**③ シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）**

- ・山田夏樹「トキワ荘と池袋のマンガ文化」（東京芸術劇場×立教大学 連携講座 池袋、2015 年 5 月 26 日、東京芸術劇場）
- ・石川巧「戦時下のプロパガンダ—小谷部全一郎『成吉思汗は義経なり』を読む—」（立教大学日本学研究所・公開シンポジウム「近代日本における偽史言説 その生成・機能・受容」2015 年 11 月 8 日、於・立教大学）
- ・石川巧「抑留者たちの表現—香月泰男・石原吉郎・長谷川四郎—」（大阪経済法科大学アジア太平洋センター公開講座、2015 年 11 月 7 日、於・大阪経済大学東京サテライト）
- ・石川巧「パネルディスカッション—占領期の京都とメディア—」（石川巧・西川祐子・北原恵、「戦後日本文化再考」於・国際日本文化研究センター、2015 年 6 月 14 日）
- ・石川巧「講演 戦後占領期の福岡における雑誌出版」（第 11 回 福岡市史講演会、2015 年 11 月 28 日、於・福岡市博物館）

**④ その他（学会発表、研究報告書の印刷等）**

- ・山田夏樹「トキワ荘と「漫画少年」」『日本文学誌要』92 号、2015 年 7 月、30～31 頁
- ・山田夏樹「戦後マンガ文化—戦後マンガの隆盛・トキワ荘と池袋のマンガ文化」『戦後池袋—ヤミ市から自由文化都市へ』、2015 年 9 月、10 頁
- ・落合教幸「資料紹介 昭和二十年、罹災直後の数通の手紙—江戸川乱歩の空襲体験」『大衆文化』第 13 号、2015 年 9 月、51～75 頁